

小さな一日

Wedge White

小さな一日

「わーっ、すごーい！お兄ん家の近くにこんなオシヤレなパン屋さんあるんだ！」

「そんなにオシヤレかな？」

「オシヤレだよー！食べたことないようなパンがいっぱいあるし、もうお店の感じがオシヤレだもん！」

こここのところ、電車に乗って遊びに行っていたあたしただけで、今日はお兄の家の近場で、ちよつとしたデート。

と言つても、十分に都会な訳でどこに行つても物珍しいものでいっぱいだ。

「じゃあ楓、先にパン選んできなよ。僕は席で待つてるから」

「うんっ！ええー、どうしようかなあ。いっぱい食べちゃうかも」

お昼を食べるために入ったパン屋さんも、すっごくいい感じで、本当にこっちに來てから都会の空気を胸いっぱい吸い込んでる感じ。

でも、空気だけじゃお腹は膨れない訳で。

「よいっ、しょ。これだけ食べるねー！」

「お、おお……」

私が選んだのはショコラサンド（ココア生地のコツペパンみたいなのに切れ込みを入れて、チョコクリームとチョコダイスを挟んだ感じ）と、イチゴのタルトと、生クリームあんぱんと、パン屋さんなのにあつたモンブラン。飲み物はホットコーヒー。

「よく食べるなあ、楓」

「これぐらい普通だよー！」

「そ、そう？それに甘いものばかり……」

「だって大好きなんだから！いつもはあんまり食べられないけど、今だけは特別！それに、ちよつとぐらい太っちゃつても、どうせ動いて痩せるもん」

「なるほど。じゃあ、僕も選んでくるよ」

「うん、待つてゐるねー！」

「いや、先に食べてくれても……」

「ダメ。お兄と一緒に食べたいの」

「……そっか」

「そうだよー」

だって、これはデートなんだから。一緒に食べて、感想を言い合いたいし、なんなら食べさせ合いつつ……。

「あ、あたし、すっかり甘々脳だなあ……」

ふと、冷静になってそんなことを考えてしまった。でも今まではこんなことできなかったら……本当になんでも、できることをしたい。

「おかえりー。このお店、慣れてるの？」

「まあ、結構利用してるかな。最近はそんなに来てなかったけど」

戻ってきたお兄がトレーに乗せていたのは、ウインナードッグと、あたしと同じショコラサンド。お兄も好きなのかな、チョコ。

「お兄は紅茶派なんだね」

「コーヒーっていうか、ミルクの後味が苦手だから。紅茶もレモンティーで……あつ、でも楓もブラック？」

「えへへー、そうだよ。すごいでしょ！」

「いや、すごいって言うか……無理してない？」

「してないよ。あたしもミルクコーヒーってそんなに好きじゃないんだよね。だから、ブラックにお砂糖だけ入れるの。そしたらこれが、甘いお菓子に合うんだよねー！」

「わかるわかる。僕も今度、同じ飲み方してみようかな」

「わーっ、お揃だー！じゃ、いただきます！」

「いただきます」

お兄は順当にウインナードッグから行くけど、あたしはどれも甘いパンだから好きなものから食べちゃう。とはいえ、どれにしようかなー……と悩んだ結果、イチゴのタルトにした。

「んっ、おいしい！うわーっ、ホントのタルトだー！ちゃんとした生地！」

「はははっ、スーパ―のとかは生地が薄かったりするからね」

「うんうん、しっかり分厚くて、でも甘くておいしー！お兄っていつもこんなの食べてるんだ。ずるいかも……」

「いや、毎日じゃないよ、さすがに」

「でも、結構食べてるでしょ？それに、他のお店も美味しくてオシャレなものが食べられるんだろうし、いいなー。毎日がキラキラ輝いてそう」

「……輝いてる、か」

「うん。そう思わない？」

「そうだな……僕はあんまり考えなかったかも」

そう言うのと、お兄はちよつと寂しそうに俯いた。

「こういう景色や、物に溢れているのが当たり前すぎて、それが楽しいとか、そういう風に感じてなかったな。でも、楓と電話するようになって、こうして実際に色々と見て回って……当たり前前の毎日は、こんなに面白いものだったんだな、って思えたよ。……本当、毎日がキラキラだ」

「そっか、そうだよな。……でも、あたしがおのぼりさんやってて、お兄の毎日が楽しくなってるなら嬉しいな。だって、同じように楽しめてることだもんね！」

「本当に。……本当、楓のお陰だよ。つまらない毎日が、楽しくなったから……」

そう言つて笑うお兄の表情も輝いていて。

あたしは、本当に好きだなあ……つて思つた

「ね、お兄。あんぱんつて食べられる？」

「うん、結構好きだけど」

「じゃ、あーん！食べさせたい！」

「はははっ……なんか恥ずかしいなあ」

「あたしも恥ずかしいよー。でもね？」

「うん……あーん」

「どうぞ！」

照れて真っ赤になつてゐるお兄の口に、ちぎったパンをぐいつ、と押し込んだ。

「んっ……美味しいよ。ほら、楓も」

「お兄が食べさせて？」

「……しようがないなあ。あーん」

「あーん！はむうっ！」

「こらこら、急いで食べすぎ」

「んふーっ！おいしー！」

それぞれ食べさせ合いっこして、同じものを食べる……それがなんだか楽しくて、嬉しくて。なんか、泣きそうだった。全然感動することじゃないってわかってるのに。でも……。

「お兄。今度、こっち来てよ。船磯のいいところとか、友達とか、いっぱい紹介したいからさ」

「うん、また行きたいな。……というか、ほとんど行っていないんだけど」

「不便だからねえ。来るだけで疲れちゃうよ。……でも、お兄に見てもらいたいものがいっぱいあるんだ。だからさ」

「うん、きつと行く。泳ぐのは得意じゃないけど、海も行きたいな」

「おぉー？それって、あたしの水着が見たいって言ってるー？」

「まあ、見たいかな……」

「あははっ、素直なんだから」

「だって、遠慮してたら意地悪して見せてくれなさそうだし」

「まあねー。わかってて見せないもんね。きつと」

「だから、欲望は素直に伝えておこうと思って」

「うんうん、その方がいいよ。……あたしも、自分に素直になったんだからさ。我慢しても、なんにもいいことないよ。……つまらない意地張ってたら、こうやってお兄と直接会うことも

できてなかったもん」

「そうだな……」

どうしよう。まだまだこっちにいられるのに。

それなのに……どうしようもなく切なくなってるあたしがいる。お兄との時間が楽しいほど、別れるのが辛くて。

だから、なんとか今度はお兄にこっちに來てもらう約束を取り付けて、気持ちを和らげようとしていた。でも、それでも、辛いよ。

「あむっ……んーっ、あまーい！わっ、すごっ、すごい美味しい！生地はほろ苦いのに、チョコが思ったよりしつかり甘くて、いいね、これ！」

「うん、僕も好きなんだ。それに、しつかりチョコが入ってるのにそんな高くないし」

「うんうん、これがもう主食でいいもん！」

「ええ……それは言い過ぎでしょ」

「いやいや、ずつと食べられるもん！」

気持ちを紛らわせるためにパンをかじったんだけど、それがまた美味しくて、割とあっさり
と悲しい気持ちは吹き飛んでた。……単純だなあ、あたし。

「じゃ、最後に」

「もう3つとも食べたの!？」

「そうだよー。モンブラン！モンブランとコーヒーはまあ、絶対に外れない黄金コンビだよね。んーっ、やつぱ美味しい！」

お兄はちよつと呆れている、というか引き気味だったけど、でも、二人で話しながらご飯を食べれて、最高の時間だった……。

同じようなパンが向こうでも食べられたら、食べる度に今日のことを思い出せて嬉しくなつたと思うのに……絶対こんなオシヤレなパンはないから、残念。

あつ……でも、料理が得意な美岬ちゃんなら作れたりするのかな……？

あたしもまあ、そこそこ作れる方だけど、さすがに家でパン焼く用意はないし……。

「なんて言うか、直接会つてから、楓のイメージ変わったなあ」

「ええー、こんな大食いと思わなかった？」

「いや、そうじゃなくて」

「……？」

「ちゃんと普通の女の子なんだな、つて」

「どういうこと？」

「なんていうか、通話での楓はすごく可愛くて、元気で、優しくて……どこか現実味がないように感じてたんだ。こない子为本当にいるんだろうか、つて」

「ええっ!?そ、そこまでじゃないでしょ、あたし」

「少なくとも通話の時点ではそう感じてたんだよ。……でも、うん。今の楓は普通の女の子で、だからこそ可愛いなってると思う」

「お、お兄……」

「改めて、好きだよ。楓」

「あたしも！……じゃなくって、ふ、ふんつ、今頃そんなこと思ったの？」

「なんでそこでツンデレ!？」

「だつてさ」

「うん？」

「普通に好きって言い合う関係になったら、それはもうゴールかな、って。……だから、まだお兄との恋愛を楽しんでいたいって言うか……」

「そんなこと……僕はいつまでだって、新鮮な気持ちで楓を好きって言えると思うけどな」

「そういうところやぞ!!」

「ええっ？」

「……そういうところが、好きなんじゃん」

あたし、本当にこの人のこと、好きだなあ。

改めてそう思った。

「ね、お兄。あたしがゴム、付けさせたげよつか？」

「え、ええつつ……」

「あつ、反応したあ。でつかくしたおちんちん、ピクピクうって動いて可愛いねー」

「か、楓、そういう冗談はさ……」

「したげるよ。んっ」

顔を赤くしているお兄を笑いながら、個包装されたコンドームを取り出すと、それを口に咥えて見せる。

「こういふの、ふひなんでしょ？」

「そ、そんなことないけど……？」

「ほんほお？」

「べ、別に、エッチだとか思ってないし……」

「ふーん、ほうなんだ」

ビリビリツと袋を破ってゴムを取り出して、それをお兄の先端に被せた。

「こつからあ……んむっ、むぐぐっ……！こういう感じ……？」

「うあつ……!？」

よくわからないけど、口で入り口を咥えて引っ張ってみたりして、なんとなーくコンドームを被せていく。

もうビンビンに勃起しているモノだから、ちよつと動かすだけでいい感じにフィットして……あつという間に濃いピンクのゴムに包まれたお兄のちんぽが出来上がった。

「ね、お兄。ゴム使ったエッチも結構したけどさ」

「うん……」

『コンドーム被ったおちんちんって、結構エッチだよね』

耳元でそう囁くと、お兄はびっくりしてのけぞった。でも、逃してあげない。ぎゅつと抱きついて、もつと耳元で。

『エッチなゴムちんぽ、どうされたい？どうやって、気持ちよくしてほしいの？』

「か、楓……」

『どんなのでもいいんだよね。お兄、あたしのこと好きだから。ふーっ……』

「うわあっ!!」

最後に思いつき耳の穴の中に息を吹きかけて。女の子みたいな声を上げるお兄を押し倒した。

……もう、あそこはぐちよぐちよになってる。早くシたくて、仕方ないの。

「お兄、騎乗位で情けなくイッチやおうね。女の子に翻弄されて、どぴゅどぴゅーって」
「んっ、うああっ!!」

「はううんっ……!!」

お兄の腰の上に座るようにして、中に咥え込む……。

大きなちんぽがメリメリメリツて膣肉をかき分けて入ってくる感じが、すごく……気持ちいい。

多分こういうのって、物理的によりも精神的にイイんだと思う。だって……。

「はううんっ!!お兄、いいよおっ!これっ……んふあああああっ!!」

「あっ、くっ、楓っ……!!」

「お兄も気持ちいいんだね?ちんこ、すっごいパンパン……精液早く出したいんだ。ゴム風船びゅーって膨らませちやいたいんだよね?」

「うっ、くっ、んあああっ!!」

「早くイこ?一緒に楽しく、エッチに……んっ、ふあああああっ!!」

腰を大きく持ち上げた後、一気に打ち下ろすと、まるで内臓がひっくり返っちゃったかのような衝撃と一緒に、気持ちよさがこみ上げてきた。

そして、中が細かく震えて、愛液がいっぱい出てきて……ああ、あたし、イッてるんだ。っ
て思った。

「あっ、出るっ……!!」

「あはっ、出ちやうんだねっ……!あたし、一緒にイこ?お兄っ……!ふあっ、くっ、きゅうんっ!!」

お兄にトドメを刺すために、もう一回、ずばんつ、と奥まで啜え込む。

「あつ、くうっ……………」

「ふあああああんっ!! イツ、ちやつ……………! 深いの、キチャああつ!!」

中でドクン、と温かいものを感じるのと同時に、あたしも激しくイツて…………頭の奥まで痺れる感覚があつた。

…………やっぱり、すつごく気持ちいい。おかしくなつちやうぐらい、好きつ…………。

「ひつ、あああんっ!! ま、まだ、イクの止まんないっ! これ、あつ、ひくううんっ!!」

「つうつつ……………! 楓の中に、搾り取られてつ…………くううっ!」

お兄の射精も、まだ止まんないみたい。…………可愛いなあ。

よくわかんないけど、きつとお兄は早漏さんだと思う。でも、それが悪いとは思わなくて…………むしろ、すつごく可愛くて魅力的だ。

だから、あたしも何度も、いくらでもイかせてあげちやう。…………あたしも嬉しいんだもん。

「はあつ、はっ、はああつ……………」

「お兄、お疲れー。はっ…………うつ、ううんっ…………えへっ…………また軽くイツちやつた」
腰を上げて、お兄のモノを抜かせてあげる。

…………コンドームはぐつしより濡れていて、抜いたあたしの膣口からも、愛液がいっぱい出てきちゃっていた。

「じゃ、ゴム取ってあげるね」

「う、うんっ……」

「あははっ、恥ずかしがらないんだ？」

「あっ……」

「いいよ。したげるから」

さすがに上手く口で取るなんてことはできなさそうだったから、普通に手で取って……それから。

「んっしょ、こんな感じかな」

「楓……？」

「あむっ……どふ？　こういうふのは？」

「うあっ……」

ビクンツとむき出しのお兄のちんぽが震えた。それから、つーって先走りも。

「んふふー　こういうふの、すひなんは？」

「べ、別に……」

「ほんほかなう？」

「そ、それより、もういいだろ……」

「んっ、そだね。……またビンビンになっちゃったお兄のちんこ、出させてあげるね……」

「うわあっ!？」

「ちゅぷあつ!ちゅつ、ちゆるじゅじゅうつ……!れるじゅつ、ちゅうつ……ちゅつ、ちゅれろおつ……!」

恥ずかしがって顔を背けようとするお兄の股間に頭を突っ込んで、ちんぽを思いつきり啜え込んだ。

えつちな味に、えつちな匂い……お兄の欲望が、全部詰まった場所。

「ぢゆるじゅずうつ……!ずちゆるつ、ちゅうつ……ちゅれるつ、れるじゅううつ!!」

「ふつ、ああつ……!やば、出るつ……!」

「んふつ……れるじゅろおおつ!!ずつ、ずずるうつ、ちゅつぷつ、ちゆるじゅうつ……ぢゅつ、じゅろおつ……!!」

「うつ、ああつ!!」

「んむうううつ!!」

お兄はすぐにまたちんぽをパンパンに膨らませちやって、あたしの口の中に精液を生中出ししちやった。

「んむううつ……!んぐつ、くつ、ごくつ、ごくつ……んつ、ちゅぱつ、れろおつ……」

「か、楓、全部飲んで……?」

「んふつ……美味しかったよ、お兄」

「楓、その顔……」

「えっちだった？」

「うんっ……ヤバいかも……」

「あははっ、じゃあさ、もーつとエッチなことしちゃう？」

「ど、どういうの……？」

「そだねー……」

言いながら、辺りを見渡した。エッチの時のあたしって、かなりライブ感で動いてるから、こういうこと言いながら何も考えてなかったりする。

「これ、お兄のオナホでしょ？」

「えっ!?ちゃんとベッドの下の奥の方に隠して……」

「あははっ、別に見つけてないのに、自白しちゃったねー!」

「か、楓ー!!」

「はーい、はっけーん!じゃ……オナホコキ、しちゃおつか？」

「い、いや、それはヤバイって……!それ、結構きついのが買っちゃったのに、楓にされたら……」

「あたしにされたら？」

「……楓に失望されるかも」

「あはははっ！一瞬でイツても何も思わないって……むしろ、嬉しいなって思うよ。あたしでそれだけ興奮してるんだって」

「そう……？」

「うん。お兄はあたしに劣情を催して、一瞬でイツちやうんだなーって思うだけだもん。彼女にオナホでちんこくちゆくちゆされたいって普段から思ってるってだけだもんね。うんうん」

「そ、そういう訳じやなっ……うああっ!?」

「はーいつ、ちゅっちゅっ、ちゅっちゅっ……」

「うつ、くっ、んああああっ!!」

「はい、どびゅー……お兄つてば、本当に一瞬でイツちやった」

「そ、その軽蔑するような視線、やめっ……あっ……」

「あはっ、追加で射精しちやったー!」

「も、もう、なんとも言つてください……」

「あはははは……ありがとう、大好きだよ、お兄」

あたし、本当にこの人のこと、大好きだなあって。
そう、思うんだよね。

小さな一日

2020年11月26日 初版

奥 付

著者 Wedge White
URL <https://wedgewhite.com>
E-Mail konjyoyasuhiro@gmail.com

本書の無断複製、複写、転載を禁止します。
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
(<http://tokimi.sylphid.jp/>)